

第54回
平成30年度

「わたしの 教育記録」

特別賞受賞作品

「特別の教科 道徳」 の可能性

兵庫県姫路市立城西小学校教諭 田村 由宏

1 はじめに

小学校で「特別の教科 道徳」が始まった。全国の教室に教科書が配られ、様々な手法が提唱され、評価の在り方も注目される新学期となった。

さて、本学級では今年度の一学期末に道徳授業アンケートを実施した。子供たちの感想を整理すると、道徳の授業に対して好意的な意見が多く、大変うれしく思った。

従来、道徳の時間の授業は学年が上がるにつれて「楽しくない」と感じる割合が高くなる傾向だった。「答えがはじめから分かっている」「当たり前のことを言われる」と感じている子供が生まれているからだ。

しかし、本学級の子供たちは道徳の授業を楽しみにしている子供が多い。「やったー。道徳だ!」という声もよく聞こえてくる。アンケートの「道徳の授業のよさは何ですか」という質問に対して、

5年1組の道徳の授業のよさは話し合いの時にあります。反対意見の人と賛成意見の人で、「どうしてそうなのか」ということで、どんどん話し合いが進むからです。自分たち

で考えた道徳の授業ができます。

と書いている子がいた。「自分たちで考えた道徳の授業」という言葉から、子供たち自身が主体的・協働的に学べていると感じているのだろうと想像できた。

道徳の授業はみんなで話し合うからすごくいいと思いました。なぜなら、私だけが意見を出したら、その意見で終わってしまいうけれど、みんなで意見を出したら「ああ、こんな風に思うのだな。」と思って、意見がパアッと広がるからです。

という感想もあった。「意見がパアッと広がる」という記述が、授業の中で対話が大切にされていると理解できる。積極的に他者理解をしようという気持ちが伝わってきた。

僕の思う道徳の授業のよさは、問題が出てきて、考えて、また問題が出てきて、考えてという、考えるということができものが道徳の授業のよさです。

という感想もあった。「課題発見↓考える↓新たな課題↓深く考える」。そのサイクルを子供たちが楽しめている。まさに、「考え議論する道徳」を楽しめているのではないかと感じた。

2 道徳の授業で

大切にしたいこと

さて、なぜこのような感想が生まれたかについて整理していきたい。私は、道徳の授業に限らずどの授業でも「～たい」という児童の意欲を引き出したいと考えている。「考えたい」「伝えたい」「理解したい」など、「～たい」が生まれる授業こそ、子供たちにとって価値のある授業だと考えているからである。

では、「～たい」を生み出すために道徳の授業づくりではどのようなことが大切なのだろうか。「発問」と「授業展開」の2つの視点から考えていく。

3 ズレを生じさせる発問

まずは発問について考えていく。道徳の授業で大切にしたい学習内容として、「価値理解」「人間理解」「他者理解」がある。3つの理解を深めることを通してねらいに迫っていく授業を計画する。

しかし、子供たちは「親切って大切だよ」「嘘をついてはいけないよ」等のように内容項目に対して一定の認識を持っている。また、社会においての、いわゆる正論を発言することで、そ

れが本当に実現できるのかまで考慮できない子供や、「自分の考え＝みんなの考え」と認識し、自分と異なる意見を「おかしい」と感じる子供もいる。

「わかつているつもり」「自分の考えがふつう」と思っている子供たちに、どのようにすれば道徳の授業の中で価値への理解を深められるのだろうか。そして、「～たい」を抱かせるためには、どのように発問を工夫したらよいのだろうか。

その答えは子供たちの発言の中に隠されていた。私は、授業の中で5つの言葉（反応）を大切にしたいと思っている。

「えっ！」

「おかしいよ！」

「どっちだろう。」

「でも……」

「私だったら……」

の5つの言葉である。これらの言葉が出てきた時こそ、子供たちの価値観にズレが生じている瞬間であり、これらの言葉の後に続く言葉を大切にすることで、子供たちはより深く考えようするのである。

私がこのことに注目したのは、2年前の一つの授業がきっかけである。第六学年で教材「銀のしよく台」を授業した際、ミリエル司教という人物のやさしさについて議論が起こった。ジ

ヤンという人物の犯した罪を許し、さらに燭台を差し出したミリエル司教の行動について、「相手の罪を受け入れた上で、さらに許してあげる」ことがやさしい。」という意見と「本当のやさしさとは、悪いことは悪いと伝えることだ。だから、やさしくない。」という意見で議論が進み、どちらも「本当のやさしさ」を一生懸命考え伝えようとしていた。

この授業は4時間目だったので、授業後すぐに給食の準備が始まった。エプロンを付けて給食を受け取りに行く子供たち。すると、食器を運びながら、「やっぱ、あれはやさしさじゃないよ。」「本当のやさしさは……。」という会話が自然と始まっていた。

ここまで子供たちが「伝えたい」「解決したい」と思えた要因は何だったのだろうか。その様子を見て道徳の授業のおもしろさを感じるとともに、どうすればまたこのような授業ができるのかを考える自分がいた。

授業記録を起し、発問のタイミングや子供たちの発言の変容をたどることで、「ズレを生じさせる」ということが「考えたい」「伝えたい」を生み出すポイントなのだと強く感じるようになった。

さて、この授業では、「やさしさ」に対する子供たちの価値観のズレから話合いが始まった。

どちらのやさしさのほうが相手のためになるかを考えたり、お互いの考えの共通することは何かを議論したりすることで、自分たちが抱いていた「やさしさ」についての理解を深めることができた。また、「なぜあの子は」のように考えているのだろうか。」と、友達のを考えを積極的に想像しようとする子もたくさんいた。価値理解のズレを生かし、他者理解にも積極的に取り組める授業展開となっていたのだった。

この授業以外にも、ズレを生かした展開の授業について整理したい。「絵地図の思い出」(第六学年 教育出版)の授業を通して発問について再度考えてみる。

●授業の概要

学習指導要領解説「特別の教科 道徳」では、高学年で異性に対して信頼を基にして、互いのよさを認め、学び合い支え合いながらよい関係を築こうとする心情を育むことを大切にしている。

この教材では、男女間の関係がよくない学級において、一人の女の子の行動によって男女の壁が崩され、仲よくなっていく過程が描かれている。しかし、本学級の児童は男女の仲がよかったので、この授業のゴールを「自分たちの学級にとって理想となる男女仲よしを考えられる」ことと設定した。

そして、そのために着目したのが本学級の係活動である。仲がよい学級だけれど、係活動では男女がはつきりと分かれていた。その関係の矛盾を問い返しの質問で活用した。そうすることで、教材を通して考えた価値のよさと、実生活での自分たちの意識とのズレを生じさせた。

●授業の流れ

(以下、Tを教師の発言、Sを児童の発言とする)

T…このクラスは男女仲よしですか？

S…はい！

T…(範読を聞いて)感想を伝えましょう。

S…なぜ男女の仲がよくないのかが疑問である。

S…仲のよくない男子に話しかけることができ
ためぐみさんがすごい。

T…めぐみさんが正彦さんに声をかけた時の、
わたしの気持ちは？

S…勇気があるなあ。

S…恥ずかしくないのかな。

T…わたしの思いは、どのように変わったの？

S…男子に無関心だったのが、手伝ってもらえるか不安になり、でも手伝ってもらえたから喜び、最後はみんなで協力できて感動していました。

T…男女が仲よくなるには、何が大切なのでしょう。

S…声をかける勇気も、それを受け入れる勇気

も、どちらも大切です。

T…このクラスは、本当に男女仲よしですか？

S…はい！

T…でも、係活動は男女別になっているけど？

S…趣味や好みが違うから全で一緒でなくてよい！

S…仲よくするべき時に仲よくできる！ それ
ぞれの違いを受け入れることも大切だ。

～以上、授業記録～

●「絵地図の思い出」児童の感想

今日の資料は、正彦さんがしっかりと絵地図を書いてくれたことがポイントでした。男子と女子の仲が悪くなっているにもかかわらず、しっかりと絵地図を書いた勇気がすごいと思いました。僕たちは仲のよいまま、この学校を卒業したいです。

私は、この時期になったからこそ考えられる、このクラスだからこそ考えられる「本当の仲よしとは何か」を考えることができました。最後まで仲よしの意味を考えて過ごしていきたいです。

この授業は子供たちにとって身近な係活動に焦点を当てて問い返した。「えっ！」という反応の後に自分たちの学級のよさを熱心に伝え始

4 導入を生かす展開

めた子供たちの姿から、教材での学びを通して
実生活を振り返ることができたと感じられた。

さて、授業の展開についても考える。まず注
目したいのが「導入」である。導入では、授業
のはじめに価値の方向を示したり学習内容を身
近に感じさせたりすることをねらっている。し
かし、この「導入」の活動をそこで終わらせて
もいいのか。

実は、導入での児童の発言は、素直な、そし
て実生活の中で実際に得てきた経験や思考が自
然と込められている、非常に大切な意見なの
である。そこで、この導入での発言を活用した授
業をつくっていきたいと考えている。

逆から考えると、中心発問の場面や終末で出
された子供の発言（思考）が、導入での発言と
変容していることが大切となってくる。「あれ？
初めは～と言っていたけど、今は～と言ってい
るよ。なぜ？」と問うことで、子供たちは思考
を比較したり振り返ったりすることができるよう
になるのである。

これは、教材の範読の場面でも当てはまるの
ではないだろうか。教師が範読した後すぐに発
問に入る授業が多く見られる。しかし、範読後

に子供たちに感想を聞いてみると、様々な価値
観を基準とした感想を発表する。この感想も、
授業で大切にしたい子供たちの発言である。

では、ここでも授業実践を紹介する。「ミレ
ーとルソー」（5年 光文書院）の授業で、導
入や範読後の感想を生かした展開を設定した。
●授業の流れ

T…「親友」とは、どのような人のことですか。
S…なんでも話せる人。かけがえのない友達。
よくケンカする人。助け合える人。

T…ミレーとルソーは親友だと思いますか。

S…親友だと思う↓クラス全員が挙手。

S…2人が助け合っていたから。

S…ミレーが描いた絵をルソーが嘘をついて買
って助けたあげたから。

T…板書を見て、本当に親友だと感じますか？
助け合っていますか？

S…ルソーが助けていただけでした。

S…親友とは言えないかな…。

T…助けていただけですよ。親友と言えます
か？

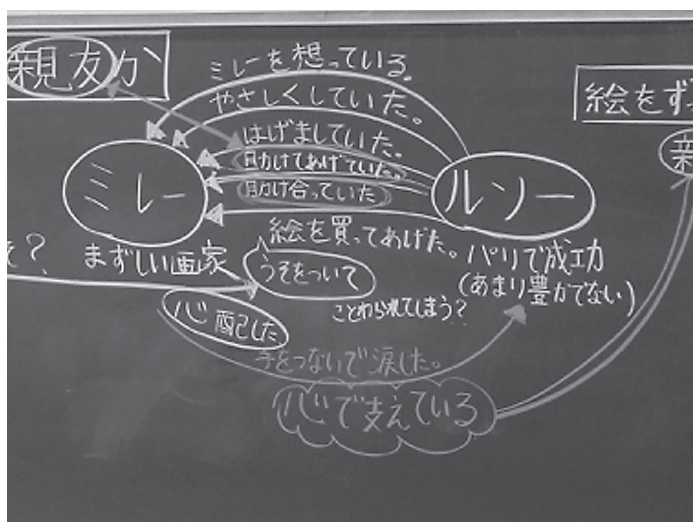
S…「言える（1名）」「言えない（他全員）」

T…みんなは最初、親友だと言いました。でも、
今は親友ではないと言っています。本当に
親友ですか。

S…ミレーはルソーに対して物では支えてはい

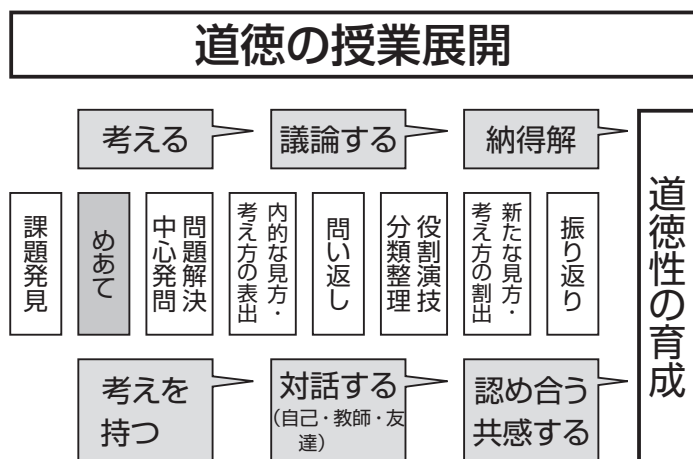
ないけれど、心で支えていると思います。

～以上、授業記録～



この授業では、導入での「親友とは助け合え
る人」という意見を活用し、「本当に助け合っ
ている？」と尋ねた。また、授業後半にルソー
がミレーの絵を嘘をついて買ったことにも触れ、
「親友とはなんでも話せる人と言ってくれたけ
ど、嘘をついているよ。本当に親友？」と問う
た。導入での発言を生かすことで、子供たちは

図1 道徳の授業展開



真剣に考えようとしていた。

5 これからの道徳の授業の展開案

さて、私は発問や授業の展開を図1のように考えている。目指すべきゴールは「道徳性の育成」である。そこに向けて発問や授業展開を工夫していく。

従来の道徳の授業は、図1の「考えを持つ」

のあたりで終わることが多かったのではないだろうか。教師が用意した発問に沿って子供たちが発言する。中心発問も教師の意図する発言から離れてしまわないよう問うことが多かった。それでは、子供たちが授業前から持っている内的な見方・考え方を表出させるだけで授業が終わってしまい、当たり前のことを言われる授業となってしまう。

しかし、本当に大切なのは「中心発問」の後の「問い返し」からではないだろうか。そこで導入や範読後の感想の比較を試みたり、本当に実現可能か考えたりすることで、新たな見方・考え方が創出されるのではないかと考えている。

また、授業後半の工夫も必要となる。現在注目されている「役割演技」。高学年では「恥ずかしい」と感じてしまう子供が多いと言われることもあるが、実際は全くそのようなことはなく、理想とする言動と実際の言動が離れてしまう高学年にこそ効果的な手法だと感じている。

私は「のりづけされた詩」という話で最後の場面を演じた。演じてみた時の心が今も残っている。とても苦しかったし、焦りもした。主人公もたぶん、心が苦しくなったと思った。自分と主人公が一体化の人間になった気持ちだった。その上、こんなに苦しくなった

のは今までなかったし、地面にひびが入って足場をなくしている状態みたいだった。非常にわかりやすかった。

これは、実際の役割演技の感想である。「どうすればいいの?」「本当にできるの?」と問うた後、教材の続きを想像して演技させ、その様子をみんなで見ると。演者の言動をどう感じたか。もし自分だったらどうしていたらどうか。そのように話し合ったり演者の気持ちに共感したりすることで、より深く道徳的価値や行動について考えることができるのだろう。

6 おわりに

学期末に実施したアンケートの中に「道徳の勉強は役に立つと思うか」という質問も入っていた。その質問に対して、

役に立つ! なぜなら、道徳の授業が楽しい人はいろいろな感情を持っていると思うから、友達もたくさんできて、いろいろな人の考えがわかって、たくさん人の声を友達にかけられるようになると思うからです。

という感想もあった。道徳の授業のよさを実感している感想である。この中の「道徳の授業が

楽しい人はいろいろな感情を持っている」という文言を、私はとても深い意味があると感じた。「いろいろな感情」という言葉が、私には道徳的心情と理解できた。善を尊び悪を憎む心。理想とする行為・行動が実現可能かどうか悩みながらも、それを実行したいとする強い心。他者の立場に立ち、様々な視点から物事を考えられる柔軟な心。道徳の授業が楽しい人は、これらの心を大切に持ち、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養っているのだ。だから道徳の授業は役に立つ。そう理解できた。

この感想を受けて、これからも「道徳の授業が楽しい」という子供を育てることを大切にしたいと強く思えた。よき学びを与えてくれた子供たちに心から感謝したい。

『わたしの教育記録』

受賞の言葉

姫路市立城西小学校

田村 由宏



この度は素晴らしい賞をいただき大変嬉しく思っています。心より感謝いたします。道徳の授業のよさは、教師も子供も対等な立場で様々な価値について考えたり議論したりできることだと思っています。教師は教え導く存在かもしれませんが、子供たちから教わることもたくさんあります。お互いに敬意を抱きながら共に学べる授業が道徳の授業だと思います。さて、私は日頃から「週1回の道徳の授業を楽しみにできる学級にしたい」と願っています。そのためには、教師自身が道徳の授業づくりを楽しめることが大切となります。しかし、全く予想通りにならなかった授業も数多くあります。いつも子供たちの素直な発言に驚かされてばかりで、子供が本来持っている物事の見方や考え方を理解できていないのだと反省させられる毎日です。授業は、「鏡」です。授業を通して教師の在り方を見直せることを喜びつつ、子供たちがより深く学ぶことができるよう、これからも授業づくりを楽しみたいと思っています。最後に、日々の授業実践において数多くの先生からご指導を頂戴したこと、この場をお借りして厚く御礼を申し上げます。ありがとうございました。